

平成 30 年度 札幌国際大学奨励研究費（共同研究）

一般社団法人北海道商工会議所連合会との
人材育成に関する産学連携プロジェクト
報告書

早期の企業訪問による、
就業・キャリア意識向上についての研究

札幌国際大学

原 一将、武井 昭也

札幌国際大学短期大学部

小林 純、石田 麻英子

連携共同研究先 一般社団法人 北海道商工会議所

1 はじめに

2015年（平成27）年4月2日より、一般社団法人北海道商工会議所連合会と札幌国際大学・札幌国際大学短期大学部（以下、本学）は、北海道経済の成長と人材育成に寄与することを目的に人材育成について積極的な連携・協力を行うことの連携協定を締結した。この協定には、企業の人材ニーズに関する調査研究や学生に向けたキャリア意識に関する調査研究、人材教育の現状・課題と新たな教育課程の設定に向けた意見交換の実施などが含まれている。連携協定締結から4年目となる本年度は、昨年度に引き続き、社会人講座と企業訪問を実施し、キャリア教育の構築や企業の採用活動に有益となっただけでなく、地方創生の観点からも大きな成果を得ることができた。

本研究に於いては「早期から企業訪問や社会人との接点を増やすことで、学生の就業・キャリア意識を向上させることができる」との仮説を立て、学生と企業の接点を可能な限り多く設定することに主眼を置いた。対話の中から得られる社会人の実際の生活、就業への意識や取り組み方、プライベートでの過ごし方、地方で働くことの魅力などについての情報が、学生の持つ既存の大人像とは異なることを想定しており、またその対話や実際の訪問の経験から、学生がどのような心境の変化を起こすのか、また起こさないのかを調査するために講義や訪問（フィールドワーク）を企画することとした。

研究成果は、本学のカリキュラム編成、キャリア教育、就業支援に寄与できるものであり、企業にとっても学生が就業前に抱えている不安や就業後への期待を知る機会となり、新卒社員の育成・コーチングを検討する際の一助となることを期待している。さらに大都市圏だけに固執しがちな学生の就職活動に対して、一石を投じるアンチテーゼになれば幸いである。

2 事業内容

2.1 社会人講座

社会人講座は2015（平成27）年度から継続して実施しており、今回の開催が4回目となる。キーワードは[道内企業][中小企業][地方企業][経営者または重役]である。今回は5名を講師として招聘し、事業の内容や仕事への取り組みについて学生と直接対話をを行うスタイルで講義を行った。ラウンド形式で1社15分とし、参加学生全員が全社の話を聞けるようにした。また、昨年度同様、研究の趣旨から、事業の様子だけでなく、仕事以外の生活やプライベートでの活動など、学生と社会人の違いについても触れていただくよう依頼、学生がリアルな「社会人」を感じることで、自ら持つ社会人のイメージが変化したかを、受講後のリアクションシートから分析した。

日程の都合上、スポーツ人間学部2年次生125名、短期大学部総合生活キャリア学科1年次生57名のみを対象とせざるを得ず、全学を対象とできなかつたことは残念であったが、

受講者は経営者の思考や社会人の就業観についてイメージをつかむことができたようであった。

日程：2018（平成30）11月21日（水）13:00～14:30

場所：1号館4階

授業名：スポーツ人間学部「キャリアデザインⅡ」内、総合生活キャリア学科「プレゼン

テーション応用」内で実施

講師：①サービス業（紋別市）

株式会社きたみらい 代表取締役 岸山絵里子 様

②ホテル業（阿寒町）

鶴雅リゾート株式会社 総務人事部 次長 久保田哲正 様

③飲食業（苫小牧市）

株式会社久恵比寿 代表取締役 畑中 稔 様

④介護福祉業（留萌市）

株式会社ファミリーケアサポート 代表取締役 田中 卓 様

⑤ホームセンター（北見氏）

株式会社坂本ホーム様 代表取締役社長 坂本 勤 様

実施方法：5つの教室に学生を分散させ、1教室あたり30名前後、1社15分のラウンド

形式で開催、1回の講義終了後、講師は教室を移動、5回終わった後、学生は
リアクションペーパーへの記入を行う。





社会人講座の効果と以降の展開

講師のアレンジメントは道商連と本学とで調整し、学生と積極的に関わりたい会員企業から選出した。講義内容については事前打ち合わせのみであったものの、詳細な注意事項を渡してあったため、最も危惧していた「単なる会社説明会」に終わることなく、各講師の身の上話から業務でのエピソード、また社会人の先輩としてのアドバイスなど、「リアル」な社会人としての話題提供、意見交換が行われた。参加学生の反応については詳細を別途報告とするが、大きく分けると以下の三点の理解を深めることができた。

- ① 認知していない業種・業界が数多くあること
- ② 社会人としての生活が必ずしも仕事一辺倒ではないこと
- ③ 地方に衣食住を構えることのメリットとデメリット

この三点の気づきを、気づきのままで終わらせないため、希望者を募り、企業訪問へと繋げているのが昨年度からの展開である。実際の職場を自分の目で見て、経営者だけでなく若手社員の話も聞き、地方都市に足を踏み入れることで、座学とフィールドワークが融合し、学びの相乗効果も高まっている。また、学生に書かせたリアクションペーパーを企業に渡すことで、今どきの学生の価値観、企業の捉え方など大変興味深い内容となり、自社の採用活動や若手社員の研修にも活かしていきたいという動きも出始めている。

2.2 企業訪問（概要）

社会人講座終了後から、講師所属企業への訪問を企画した。社会人講座で関心を持った企業への追加調査という形で、学生による情報収集または職場見学を実施し、ただ講義を聴くだけではなく、フィードバックとしての機能を企業訪問に持たせることを意図したものである。昨年度と違うところは、全員の学生が自主的に応募してきたということである。昨年度は手探りの説明であったが、今年度は昨年度の様子を見せながら説明できしたことや、社会人講座における講師のインパクトが強かったことも要因として考えられる。

日程：2019（平成31）年2月12日～15日（北見、紋別、阿寒）

2019（平成31）年2月19日～20日（稚内、留萌）

2019（平成31）年2月26日（苫小牧）

訪問企業：株式会社ホームセンター坂本（北見市） 株式会社きたみらい（紋別市） 鶴雅リゾート株式会社（阿寒町） なかせき商事株式会社（稚内市） 株式会社ファミリーケアサポート（留萌市） 株式会社久恵比寿（苫小牧市）

※なかせき商事株式会社は社会人講座には参加せず



2.3 企業訪問（企業別詳細）

① 株式会社ホームセンター坂本（訪問日 2019年2月13日）

会社名 株式会社ホームセンター坂本

所在地 北海道北見市中央三輪6丁目443番地1

代表者 代表取締役社長 坂本 功

創業 1985（昭和60）年7月25日

資本金 2,500万円

売上高 7億8,000万円

社員数 25名

※2019年4月30日時点

<北見市概要>

面積は全国で4番目に広い 1427.56 平方キロメートル。石北峠から常呂地区のオホーツク海まで 110Kmは「箱根駅伝」の距離に相当する。女満別空港は臨空拠点として、観光・物流の飛躍的発展を全国に中継し、オホーツクエリアの可能性を発信している。世界一を誇るのは、ハッカの生産量（昭和 14 年当時）、世界最大級のからくりハト時計塔「果夢林（カムリン）、堅穴式住居の数であり、日本一を誇るのは、玉ねぎの生産量、ホタテの水揚げ量、白花豆の生産量、カシワの木、カーリング（オリンピック出場）、エゾムラサキツツジ群落（おんねゆ温泉つつじ公園）、水銀含有物リサイクル施設である。なお北海道一を誇るのは、焼肉店数（人口あたり）、最初にできた地ビール（製造免許を申請・受理は日本一）である。なお、平成 31 年 3 月のハローワーク北見の有効求人倍率（原数值）は 1.08 倍（前年度同月より 0.15 減少）である。

<訪問記>

北見市に限らず道内地方都市に共通するのは若年層労働者不足であるが、これはひとえに大学新卒者の U ターン率の少なさに尽きる。今回訪問した地域はどこも同じ悩みを抱えているが、訪問学生による学生目線での企業・地域発信には限界があり、やはり企業と行政による積極的な発信がなければこの問題は解決しないだろう。

同社の場合もホームセンターに併設してアウトドアショップを開設している。社長の尽力で有名アウトドアメーカーの商品も扱えるようになり、これには学生も目を輝かせていた。北見出身の学生ではないが、札幌のスポーツショップでアルバイトをしており、偶然にもアウトドア商品の売り場担当であった。本人も将来はこのような仕事を希望しており、働く地域にもそれほどこだわりがない。むしろ道外へ出るよりは道内に残って働きたいという希望を持っている。偶然が重なった出来事であったが、これほどまでに学生を引き付

ける魅力があるのであれば、惜しむらくは現在の情報発信力である。社長自身も熱い情熱を持っているがゆえに残念でならない。

学生との質疑応答では、道路を挟んで真向かいにある国内屈指の大手ホームセンターに関する質問が出た。これはいずれ社会に出る学生諸子にとって、どの仕事に就いても遅かれ早かれ直面する問題である。しかし、少なくともここ北見市では客層の棲み分けができており、古くからこの地に根を下ろして商売をしている同社を訪れるお客様も多いらしい。むしろ相乗効果もあるらしく、決して悪いことばかりではないそうだ。





② 株式会社きたみらい（訪問日 2019年2月13日）

会社名 株式会社きたみらい

所在地 北海道紋別市落石町 2-20-23

代表者 岸山絵里子

創業 昭和 62 年

※2019年4月30日時点

<紋別市概要>

紋別市は、冷涼で低湿な北海道内では比較的に穏やかな気候に恵まれ、道内でも早くから漁場として開け、その豊かな「海」に支えられた大自然を活かした『水産業のまち』として発展して来た。そしてオホーツク海の中央に位置する紋別港は『重要港湾』に指定され、移出入のみならず水産物を中心とした海外との重要な貿易港でもある。同時に紋別市は農林業も盛んである。農業では酪農や畜産、 畑作などが営まれてきている。酪農の中心は乳牛・肉牛で、毎日 160 トン以上も生産される牛乳は市内の工場で新鮮な乳製品に加工され出荷されている。また畠作では、海に負けないぐらいの恵みを もたらす豊かな大地の中で古くからの主幹作物であるビートのほか、スイートコーン、じゃがいもの生産が取り組まれ、オホーツクの食料生産基地として歩んでいる

<訪問記>

株式会社きたみらいの創業は昭和 62 年で、最初は商店からスタートした。現在では仕出し関係の仕事をメインに行い、最近では学校給食やお年寄りの方用の宅配弁当、地域のイベント時のお弁当など手がけている。今回の研究では、BtoB 企業における仕事の流れ・可視化もテーマの一つだっただけに、自社が取り引きをしている幼稚園にまで行けたのは大きな成果であった。この体験で「取引先との付き合い方」だけではなく、「業務の複線化」や「お金の流れ」についても学んだのではないだろうか。また、社長のほかにもスーパー

バイザーや 2 名の若手社員が登場してくれた。それぞれのヒューマンヒストリー（入社動機へキャリアの遍歴）についても語ってくれたので、将来を考えるうえで参考になったであろう。

スーパーバイザーは前職を定年退職され直ぐに同社から声が掛かったようだ。これはどんな仕事でも日々きちんとこなしていれば、誰かが必ず見ていてくれて声をかけてくれるということである。人生 100 年時代のマルチステージを考えるとこのような生きた事例こそこれから的人生を考えるうえで教本となる。同社は会社こそ小さいが、地方の小企業で働くことのメリット・デメリットも若手社員から聞くことができた。





③ 鶴雅リゾート株式会社（訪問日 2019年2月14日）

会社名 鶴雅ホールディングス株式会社

所在地 北海道釧路市阿寒町阿寒湖温泉 4-6-10

代表者 代表取締役社長 大西雅之

創業 昭和31年3月16日

資本金 5,000万円

売上高 107億円

社員数 683名

※2019年4月30日時点

<阿寒町概要>

阿寒町（あかんちょう）は、北海道東部、釧路支庁管内の阿寒郡にあった町であり、マリモで有名な阿寒湖を有する。町名はアイヌ語由来であるが、その語源については諸説あり、アカム（akam 車輪）とする説やラカン（rakan ウグイの産卵）に関係するという説、地震の時雄阿寒岳が動かなかったことに由来するという説がある。釧路市から北西約40kmに位置。阿寒湖から南流する阿寒川の流域を占め、町域は南北に細長い。阿寒川に沿うよう国道240号が縦断している。中心である阿寒地区は南部の釧路市に近い場所にあり、ここに町役場が置かれていた。北部は阿寒摩周国立公園に属し、阿寒湖、阿寒湖温泉を有する山岳地帯であり、一年を通して全国、海外特にアジアから多くの観光客が訪れる。かつては雄別炭鉱を中心とした炭鉱の町として栄えていたが1970年2月に閉山。街は大打撃を受けた。現在は酪農、畜産、阿寒湖を中心とする観光が基幹産業。釧路市との合併後、もとの阿寒町役場は阿寒町行政センターとなった。

<訪問記>

全国的な観光地として有名な阿寒湖温泉であるが、札幌からの距離は決して近くない。ましてや働くとなるとそこに衣食住を構えることになり、それに対して抵抗を示す学生が少なくない。インバウンド客で賑わう同ホテルであるが、今回は「働く」と「住む」について考えさせられた訪問である。

ここ数年離職率の上位は、飲食業と宿泊業で揺るぎがない。AIが普及する近未来までは言及できないが、少なくとも現時点では二業種とも人海戦術を取らざるを得ない業態である。「人材」より「人手」という次元で停滞している企業も多い。しかし同社社員から感じられたのは、見た目に疲弊したスタッフが少ないことである。

今回は様々な部署を案内してもらい、ホテルにも宿泊し、ある種ミステリーショッパーのように同社を体感したわけであるが、ワークライフバランスをスタッフ自らが意識しているのではないだろうか。そして同社もそういう働き方を奨励しているように思えてならない。今回は本学のOBも参加してくれたが、彼自身、出身が札幌で、就職は東京を考えていたものの、大学時代のインターンシップで知った同社に就職した。人脈が減りこそそれ増えることはないと思っていたらしいが、全国各地からやってくる宿泊客と毎日新しい出会いがあるそうだ。また、休みが長期で取れるため、普通の企業では経験できない休みの過ごし方をしている。あえて言うならば、少し小さめなヨーロッパのバカンスという表現が適切だろうか。ホテルの仕事についてもいろいろと話は聞けたが、学生にとって一番ためになったのは「新しいスタイルの働き方」を目のあたりにしたことだろう。





④ なかせき商事株式会社（訪問日 2019年2月19日）

会社名 なかせき商事株式会社（平成21年8月1日社名変更）

創業 昭和24年4月

設立 昭和38年3月

資本金 4,560万円

稚内本社 稚内市中央5丁目2-31

旭川本社 旭川市末広4条3丁目3-18

拠点一覧 札幌事務所 | ベンリー環状通り豊岡店 | ベンリー札幌美園店 | ベンリー札幌琴似店 | 留萌事務所
営業内容 石油製品の卸・小売販売 | 液化石油ガスの卸・小売販売 | アスファルトの販売 | ガソリンスタンドの経営 | 自動車の軽整備・法定点検業務 | 自動車部品・用品の販売 | 各種暖房機器・各種ガス器具販売 | 各種住宅設備機器の販売 | 消火器及びその薬品の販売 | 家電製品の販売 | 贈答品・産直品の販売 | 健康食品の販売 | 服飾品・宝石・貴金属の販売 | 潤滑油の販売 | カーリース業 | 建設業における管工事・下水道工事の請負業 | クリクラ北海道 販売代理店 | 便利屋FCベンリー加盟店
代表者 代表取締役 岡田 清一
年商 平成30年度 74億4千万円
平成29年度 65億6千万円
平成28年度 51億3千万円
※2019年4月30日時点

<稚内市概要>

日本最北端に位置する稚内市は、宗谷海峡をはさんで東はオホーツク海、西は日本海に面し、宗谷岬からわずか43kmの地にサハリン（旧樺太）の島影を望む国境の街である。「水産」・「酪農」・「観光」を基幹産業とする宗谷地方の行政、経済の中心地であり、隣国ロシアとも交流が深い。サハリン州をはじめとする北方圏諸国への玄関口としても知られている。人口は平成29年12月末日現在で34,834人（男17,097人、女17,737人）となっており、18,114世帯である。年齢別に見ると、60歳代の割合が最も多く、40歳代、50歳代、70歳代と続いている。約3人にひとりが60歳以上となっている。また、外国人は、362人が稚内市民として登録されている。日本の最も北にあり、宗谷海峡を中心にオホーツク海、日本海に面している稚内市は、利尻礼文サロベツ国立公園を有する、豊かな自然環境が広がっている。平均気温は7度前後で、最高気温は22～28度、最低気温はマイナス10度～14度となっており、冬になると宗谷岬の海には、流氷が接岸することもある。稚内信用金庫は別格として、他都市と比べたとき、定期的に新卒採用をしている企業が少ないのがUターン率を下げている要因と思われる。

<訪問記>

稚内と旭川の二都市に本社を持つ同社であるが、事業領域は広い。石油の卸売り～ガソリンスタンド経営を柱として、様々な分野に果敢にチャレンジしている。

訪問当日は採用担当者以外にも、取締役一名、若手社員二名が参加してくれた。本社のほか、運営しているリハビリ施設の見学もさせていただいたが、貴重だったのは終礼への参加である。社会経験のない学生にとって、朝礼や終礼のようなものは極めて珍しく、そ

の瞬間に立ち会えたことは今回の収穫のひとつであった。

また、全員が稚内に来たことがなかったため、それまでのイメージも「何もないところ」というステレオタイプなものであったが、失礼ながらコンビニエンスストアがあることに驚いていた学生もいた。札幌にあるドラッグストアや全国展開しているレンタルCDショップ、飲食店などが普通に存在していることも新鮮だったようで、「便利ではないが不便でもない」というのが率直な感想であろう。また、若手社員との座談会では、当然ながら「稚内で働く」ことより「稚内に住むこと」のほうに質問が及んだ。「普段の生活で特に困ることはない」「たまに札幌へは遊びに行くのでそれで十分」「転職するとなれば札幌を飛び越えて東京へ出る」等々、現在のライフスタイルに特段悩んでいる様子も見られなかつた。札幌の学生はとかく「札幌で生まれ育ったので、働くのも札幌で」と思いがちだが、その是非はともかく、凝り固まった固定観念に一石を投じたのは間違いないだろう。また、一度入社したものの、転職をしてから、また戻ってきたという貴重な経験も聞くことができた。昨今、巷を賑わせている働き方改革であるが、そのように柔軟な雇用を既に同社は実施しており、そのためには日々の仕事をきちんとこなすことが次のステップに繋がるということも実感したのではないだろうか。





⑤ 株式会社ファミリーケアサポート（訪問日 2019年2月20日）

会社名 株式会社ファミリーケアサポート

創業 平成12年4月（法人設立平成13年12月）

代表者 代表取締役 田中 卓（社会福祉士、介護福祉士、介護支援専門員、介護福祉経営士1級）

資本金 800万円

本社所在地 〒077-0007 北海道留萌市栄町一丁目5番6号

従業員数 102名（平成29年6月現在）

※2019年4月30日時点

<留萌市概要>

留萌市は北海道の北西部に位置し、ニシン漁とともに発展し、日本一の生産性を誇る「かずの子」をはじめとした水産加工業、国の重要港湾「留萌港」と国道3路線の結束点、さらに高規格幹線道路留萌深川自動車道の整備といった交通・物流の拠点、国や北海道の官公庁が集積した市である。

市の地形を概観すると、東西に走る留萌川を中心に両翼には平原、丘陵が続き、南側の

地形は比較的高度のある山並みがあり、北部は低位な丘陵地である。豊かな自然に恵まれた同市は、西には日本海、南北には暑寒別天売焼尻国定公園が連なり、暑寒別山系をはじめ夢の浮島といわれる天売・焼尻が望まれる。特に晴れた日には、遠く利尻の島影が夕陽の輝く日本海に浮かぶ姿が見られ、風光明媚な市である。

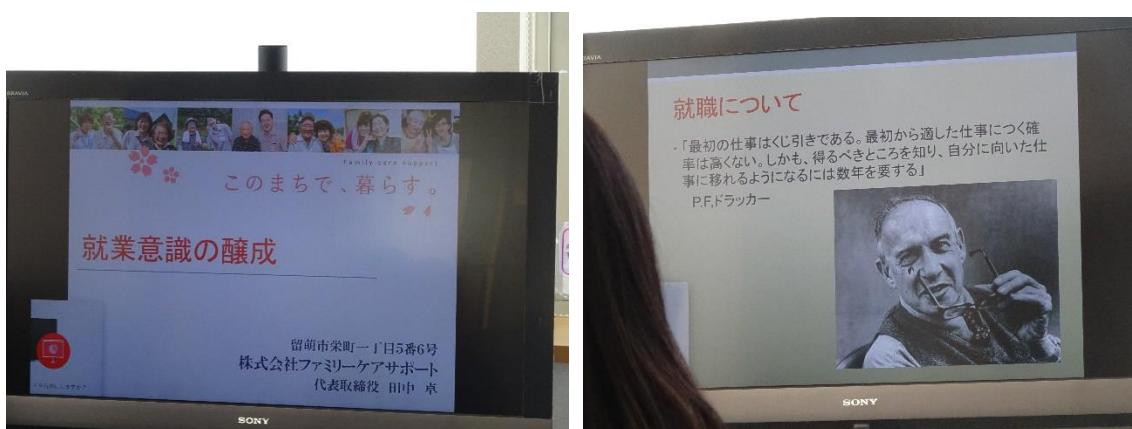
また、市を挙げてU・Iターン就職に力を入れており、留萌出身者にこだわらず留萌市で働きたい人、留萌で暮らしたい人を応援している。そのために、Uターン人材推進奨励金制度を設けている。これは企業がUターン等の就職を希望している社会人を雇用するためにその就職に係る費用（面接・就職等）を負担した場合、その企業に対して奨励金を交付する制度である（企業負担の3分の2、限度額30万円）。

<訪問記>

同社は人材育成に力を入れている。社長もまだ若く、社員に賭ける思いは熱い。同社のテーマは二つ、「人間力」と「専門性」である。どれだけ経験が長くても、資格を沢山保有していても、礼儀がなく挨拶ができない人は認められない。しかし、笑顔がどれだけ素敵でも、プロとしての専門性がなくてはいけない。それを踏まえ、人間力と専門性の人材育成をバランス良く計画的に研修で取り入れており、同社の人材育成部が年間計画を立案し全社で年間3,000時間の研修に取り組んでいる（平成27年実績2500時間）。

「福祉」と「介護」、業界としてこれから伸びることはわかっているものの、専門的な学びを大学で経験していないと二の足を踏んでしまう業界でもある。働く側が疲弊しているという負のイメージがつきまとい、積極的に就職しようとは思わない業界であるが、同社の社風に感じ入った学生も多かったのではないだろうか。それはひとえに「明るさ」と「おもてなし」である。

さらに社長自身が大変な勉強家であり、今回の訪問に関してもその意図を把握してくれて、冒頭は就職活動に関する講話をしてくれた。ドラッカーについての話などもしてくれたため、大学で教わった座学が腑に落ちる瞬間を感じたはずである。「地方都市」「不人気業界」という二つの括りだけで遠ざけるのはもったいない会社だ。





⑥ 株式会社久恵比寿（訪問日 2019年2月26日）

商 号 株式会社 久恵比寿
 本 店 北海道苫小牧市新富町2丁目3番4号
 創 業 昭和35年7月
 資本金 900万円
 代表取締役社長 畑中 稔
 従業員数 250名

事業内容

- ・飲食店業
- ・フランチャイズチェーン店の加盟店募集及び加盟店の指導業務
- ・フランチャイズチェーンシステムの研究開発、新店舗展開に関する立案と市場調査
- ・食料品の販売
- ・飲食業、流通業に関する経営コンサルティング業務
- ・インターネットを利用した商品広告及び商品販売並びに斡旋業務
- ・ホテルや福祉施設へ寿司のデリバリー供給
- ・デザイン制作
- ・スポーツ団体への支援

※2019年4月30日時点

<苫小牧市概要>

苫小牧市は、室蘭市と共に道内屈指の工業都市として知られており、製紙業などが盛んである。日本一食べにくいお菓子として一部で有名だった「よいとまけ」を製造・販売する株式会社三星の所在地でもあり、北寄貝の漁獲量が日本一の街でもある。

またスポーツ都市宣言を行っており、高校野球で有名な駒澤大学付属苫小牧高等学校が市内にあったり、スケートやアイスホッケーが盛んであったりとスポーツに力を入れている都市である。

観光名所としては、山頂から支笏湖を一望できる樽前山や、植物の宝庫・野鳥の楽園として知られるウトナイ湖などがある。交通面は道内でもかなり発達しているほうであり、鉄道はJR室蘭本線・千歳線・日高本線が走っている。市の中心駅である苫小牧駅には函館・室蘭方面へ向かう特急列車が停車するほか、札幌まで普通列車一本で行ける。高速道路は道央自動車道および日高自動車道が走っており、市内にある苫小牧東ICで接続している。また、苫小牧駅から東に3km程の地点にある苫小牧港（西港）には八戸・仙台・大洗・名古屋からのフェリーが、隣の厚真町まで跨る苫小牧港（東港）には秋田・新潟・敦賀からのフェリーが到着する。さらに、新千歳空港の敷地の一部は苫小牧市にまで跨っている。このように、同市は陸・海・空すべてにおいて交通の要所となっている。

<訪問記>

外食産業でアルバイトをしている学生は多いが、就職先として積極的に選択する学生は少ない。それは何故だろうかー仕事の中身が容易に想像しやすい、仕事内容がアルバイトと変わらない、人手不足で休みがない、薄給である等々、挙げていけばキリがない。しかし、店長ではなく社長の話を聞く機会というのはアルバイト先でもそうある経験ではない。社長自身が大変な苦労人であり、勉強家でもあることから、常に革新的な考え方を持って自社を運営しているが、大事な点はサラリーマン社長ということである。

地方都市の場合、その是非はともかく、代々続いているオーナー企業が多い。しかし同社は同族経営をやめ、人事の刷新を行ったのである。これが同社にとってひとつのターニングポイントになったのではないだろうか。

学生との座談会でも、社長自ら全て答え、どの回答においてもユニークな発想から繰り出される内容であった。「どの会社で働くか」「どの都市で働くか」も大事であるが、「どの人と働くか」「どの社長の下で働くか」という視点も必要と思わされた訪問であった。老人福祉施設からの要望で始まった一件の出張握りが、今や数倍にも売り上げが伸び、お年寄りからも大好評ということを考えると、ビジネスチャンスはどこにあるかわからず、それがCSRにも繋がっているのは特筆に値する。





2.4 成果報告会～今後の課題

社会人講座～道東・道北・道央における企業訪問を経て、自分たちの「学び」や「気づき」「発見」についての成果報告会を開催した。

日程：2019（平成31）年3月18日（月）

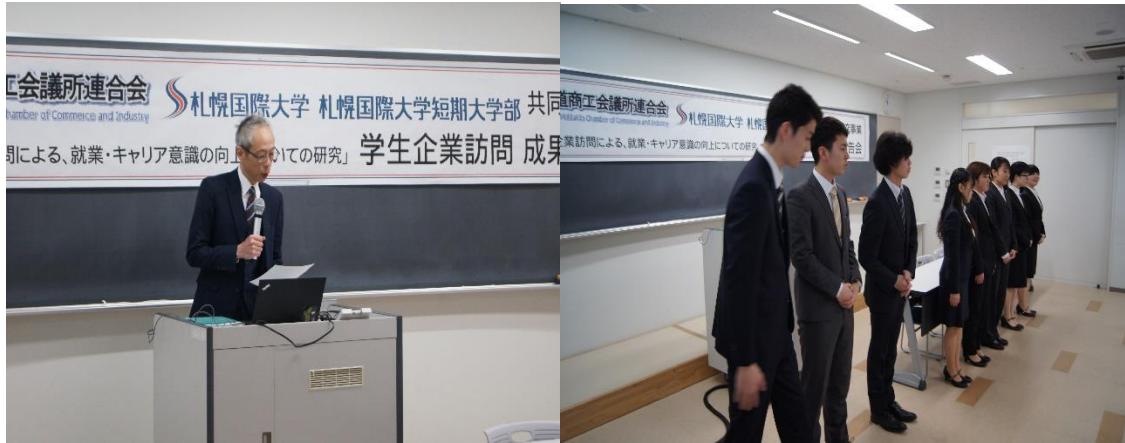
場所：札幌国際大学2号館4階

参加企業：株式会社きたみらい（紋別市）／なかせき商事株式会社（稚内市）／株式会社久恵比寿（苫小牧市）／株式会社ファミリーケアサポート（留萌市）

参加団体：一般社団法人北海道商工会議所連合会

「これまで大企業で働くのが格好いいと思っていたが、自分も一緒に会社を作っていく地方の中小企業もいいと思った」「初めて訪問した地方都市だったが、社会人の話を聴いて地方都市の生活スタイルがよくわかった」など、学生ならではの意見が多かった前半のプレゼンテーションであった。後半はフリートークであったが、どうやつたら地方が活性化するか？についてのディスカッションも行われた。情報や物流の格差も昔より少くなり、自然豊かな地方都市で暮らす利点は増している。悪い面だけでなく、このような良い面をいかにして学生が理解し、企業側も発信していくかが今後の課題であろう。









3. 学生の学び（訪問直後のインタビューコメントから）

参加学生は、前述したように、訪問後に各チームで意見を共有し、成果報告会に向けた資料やプレゼンテーションの作成を行い、フリートークにも参加し意見を述べたが、それだけでなく、訪問直後に感じた各自の率直な感想・意見を、訪問ツアーの最終日に、ビデオカメラに向かって語る形で残している。各学生のコメントを以下にまとめる。

① スポーツ指導学科1年 藤 美凪（道東、苫小牧参加）

現在一人暮らしをしており、自炊に苦労しているので、働きながら自分で生活ができるかという不安があったが、寮のある会社で生活している方のお話を伺って、寮があるところ、というのを条件に考えるのも一案だと思った。

全体を通して、仕事を辞める理由が、仕事そのものが嫌になったというケースよりも、人間関係が原因になることが多いと知り、今後の目標として、うまく人間関係を築けるようになることが大事だと思った。

また、一つの仕事を長く続けている人は、最初からやりたいこととプランが明確に決まっていることが多いと感じた。やりたいことは決まっているので、私はそれを続けられるように、今からしっかりとプランを立てて進んでいきたいと強く思った。

② スポーツ指導学科1年 平井 ひかる

今まで全く知らなかつた、企業の、人々の働く現場を実際に訪問してみて、世界が大きく広がつた。今まで、「客側」の立場でしかものを見られていなかつたのだということを実感した。実際に働く方たちのお話を聞き、裏側の現場を見てから、表の世界を見たとき、従業員の方の動き方や対応、お店のディスプレイなどを、働く側の視点からみられるようになった。特に、鶴賀では、以前客として家族で利用したことがあつたため、従業員の方のお話を聞いた後自分の見方が変わつたことをより強く実感できた。今

後、様々なところを客として利用する際に、客側の視点からだけではなく、働く人の視点でもものがみられるようになったと思う。この自分の変化が、今回一番の成長だと考える。

どの企業でも、最初は挫折することがあるが、それを乗り越えられるように日々学びながら成長するのだとおっしゃっていた。就職してすぐは、不慣れで未熟な自分たちならば、注意され怒られることも当然だと考え、すぐに逃げ、やめるのではなく、続けていける力を今からつけていきたい。

皆さんが日々に、毎日が勉強だとおっしゃっていた。今でも、学内だけでなく、ボランティアやアルバイトなど、大学の外で活動することで学ぶことが大きいと実感しているので、今後も、活動の場を広げ、チャンスを利用し、成長を続けたいと、より強く思うようになった。今回は特に、企業の方とお話をしたため言葉遣いは相当勉強になったと感じている。

③ スポーツ指導学科1年 星屋 沙弥佳

参加する前は、上司は部下に指示する人、というイメージがあったが、今回見学したどの企業でも、上司と部下が一つのチームとなって、ともに会社を成長させていこうとしている感じが伝わり、そのチームワークがうまくいっているところが成長する企業になるのではないかと考えた。

そのうえで、今回ともに訪問した2年生の先輩方が、1年しか変わらないのに、先生に対して、訪問先の方々に対して、後輩である自分たちに対してもさりげなく細やかな気遣いができていて、こういうことがよい人間関係、チームを作るのに大事なのかもしれないと思った。自分も今後そうできるようになりたいし、特にこうしなさいと言うわけではなく、自分たちの行動で私たちに学ばせてくれたので、自分も先輩という立場になったら、そのような存在になりたいと強く思った。

参加する前は、社会で働いたら、女性のほうが下に見られるのかな、と漠然と思っていたのだが、現場で女性の方が対等に働いている姿を見ることができたし、きたみらいへの訪問で特に、女性が働きやすい環境が今はかなりできてきているのだと実感することができた。出産後も、女性の働く場所が用意されているのだと実感することができ、結婚出産したら働く場所がなくなるのだろうかと感じていた不安が解消され、将来働くことに対してより前向きになれた。

仕事が好きなことと強く関わっている人は、やはり多少つらいことがあっても乗り越えられるのだと思った。まだ、これができるなら…と思えるほど好きなことが見つかっていないので、探してそれを仕事につなげたい。

若手社員の方々とのお話で、新人のうちはつらいこと、挫折することも多いが、努力して乗り越えられないことはないし、その先にこそ楽しさがあるのだと実感することができた。仕事をする未来に対して、前向きになれた訪問だった。

④ スポーツビジネス学科2年 佐藤 郁弥

鶴賀では、従業員の方々の動きなどに注目して過ごしてみて、ただ宿泊するよりもずっと楽しかったので、ものの見方を変えるだけで倍楽しむことができるのだと実感した。

地方の企業を間近で見る機会が初めてで、思っていたより、社員の方同士の距離が近くでいいと感じた。小さいところは特に、訪問しているその間だけでも、お互いが理解しあって楽しそうに働いている雰囲気が伝わった。鶴賀のような大きな企業でも、寮で生活を共にし、休憩時間などもみんなで楽しく過ごしている様子を伺って、社会人は生活の中でも、仕事の中でも、思っていたより楽しんでいるということを実感させていただいた。特に鶴賀では、ホテル業といえば朝早くから夜遅くまで働くというイメージしかもっていなかったのだが、実は間に長い休憩をとって、その時間を有効に使っていたり、同僚と休みを合わせて遊びに行ったりしていると伺い、社会人=遊べないというイメージが覆された。

実際に訪問してみると、事前に考えていた質問以外にも、どんどん聞きたいことが出てきて、自分でも思ってもみなかつたようなことも質問でき、さらにそれに親身になって答えていただけたので、本当にいい勉強になった。

まだ具体的な将来の夢はないが、皆さんが出でて、「やりたいことをやつたらいいよ」とおっしゃったので、とりあえずやりたいことをやってみようと思えた。みんなの姿から、「やりたいことができている大人は本当にカッコいい」「何よりも、やりたいことがあるということがカッコいい」と強く思った。さらに、それを極めていくということは本当にすごいことで、とても尊敬できると強く感じたので、自分が本当にやりたいことを早く見つけ、それに向かってどんどん勉強していきたいと思っている。

まず手始めに、今もアルバイトで、自分の興味関心のある分野で働く経験はできているので、卒業するまでずっと続けていきたいと思うようになったし、今後就職に向けては、そういった「経験」を大事にしたいと考えている。

⑤ スポーツビジネス学科2年 塚越 賢悟

一番良かったと感じるのは、このような機会でもないと訪れることがないような地域を訪問でき、そこで見聞きする様々なことを通して考え、自分の視野を大きく広げられたことである。

北海道、特に地方は、若い人たちが少なく、活気がないイメージがあったが、実際に回ってみて、地元出身でもない若い世代の人たちが、その地方を盛り上げるために頑張っている様子を目の当たりにして、都会にこだわらず、自分の力で楽しめる場所を作るために地方で働くこともおもしろそうだと感じた。

その地方を盛り上げていくために自分の会社を盛り上げていこうという考え方の元、地元の人たちを巻き込んで、それを牽引するような働き方をするのもおもしろそうだと強

く思った。観光資源のある地方で、よそから来た人たちに、その土地の良さを伝える仕事は楽しそうだと思う。また、外の人が楽しみに訪れてくれるような場所を作るために動き、たくさんの人を楽しませることができる仕事は、面白いだろうなと感じた。自分は人とコミュニケーションをとることが好きなので、人と接して、その地域を盛り上げていく仕事はやりがいがあるだろうと思う。

苫小牧訪問時に伺った『無敵の社員の方程式（タフ、アクション、インテリジェンス、野望、謙虚）』の中で、自分は野望以外の条件はクリアできそうだと思ったが、野望といえるほど強い望みがまだないので、それを見つけていきたい。訪問先と同じ業種でアルバイトをしている友人もいるが、意識が低いというか、仕事はしているだけで、大事にしておらず、目標もなく向上心もそれほど感じられないのに対し、お話を伺った社員の方々はやはり、よりよくしていこうとする意識、目標の持ち方が全く違った。

まだ就職活動まで時間があるので、たくさんの企業を実際に見て、いろいろな分野の仕事を知って、自分は何がやりたいか絞っていきたいとさらに強く思った。説明会などでは話してもらえないことも多いと思う。現場の生の声を聞き、自分で見て、自分で質問することは、本当に貴重で素晴らしい機会だし、とても大事だと実感している。ホームページやパンフレットからだけではわからない、現場の人と現場で直接接してわかることは多いはずだ。今後も機会があれば積極的に参加していきたい。

⑥ 総合生活キャリア学科（短大）1年 島津 舞華

初めて道北を訪れ、名前しか聞いたことのない都市を歩いて、自分が知らない土地でも人々は普通に生活をしているのだと実感し、視野が大きく広がった気がする。

同じ年でもう働いている友人はいるが、友人としてではなく「社会人」として話を聞く機会はなかなかない。今回、留萌で若手社員の方とグループワークをさせていただき、同じ年でもすでに仕事をしている人は、こんなにもしっかりしているものなのか、と大きな衝撃を受けた。学生である自分が見ることのできない視点でのものを見ていると思う。

「自分のミス」のとらえ方が、私と違ってとても繊細で、ミスしたことそのものにこだわってしまうのではなく、全体や先を見る目線でとらえられているのがいいと思った。お話を通してこうした気づきが色々あり、自分もそちらの方向に視野を広げることを教わって、こういう経験のない人、なかった時の自分より成長できたと思う。同時に、社会人として働くようになったら、その生活の中で、自分も学び、こういう考えができるようになるのだろうかという期待も感じることができた。

⑦ 総合生活キャリア学科（短大）1年 渡部 ななみ

社会人が、仕事に対して思っている「楽しいこと」を直接聞くことができて、社会人は思っていたよりも自由だと感じ、社会人になることに対してより前向きな気持ちになれた。

稚内で、「車をもって、学生時代よりも多くのお金を自由に使えるようになり、行動範囲も広がった」というお話を若手の女性社員の方から伺ったときに、使えるお金にも限界があり、その使い道も日々の作業スケジュールも、自分ですべて決めることがなかなか難しい学生と違って、お金を使うにしても、仕事の進め方についても、自分で決めて行動できるところに、社会人の自由さを強く感じた。訪問前は、社会人は仕事をして家に帰ったら疲れて寝るだけ、というイメージだったのが、余暇の過ごし方や日々の過ごし方のリアルな話を直接聞いて、考え方方が変わった。

大都市の企業よりも、地方の大きくない企業のほうが、達成感ややりがいを感じられる機会が多く、人間関係も円滑で、そこで過ごすことを楽しんでいるような印象を受けた。

留萌では、働く前と今で、抱いていたイメージに大きなギャップはなかったかとうがった際、プラス面のギャップは多かったが、マイナス面はあまりなかったとお答えいただいたのが、大変印象的だった。今後の就職活動では、自分も、そういえるようなところで働きたいと思い、説明会などでは、仕事のことだけでなく、積極的に、働いている人たちの日常の様子や考え方などを聞いてみたいと思っている。

⑧ スポーツビジネス学科2年 都筑 龍

参加する前は、仕事というものは堅いイメージしかなかったが、参加してみて、やりがいや目標を自分で見つけて、アットホームな環境でのびのび働いている様子を実際に目の当たりにし、働くことに対する怖さがなくなり、安心することができた。

最も印象に残っているのが、留萌で、若手社員の方とのグループワークの際、最後にお話ししてくださった19歳の方である。自分より1歳年下であるにも関わらず、とてもしっかりされていて、自分の目的を明確にして仕事をされていることに、大きな衝撃を受け、自分ももっと頑張らなければ、と強く思った。

地方都市を回ってみて、率直な感想としては、「札幌は何でもあるんだな」ということだが、それは動こうとすればすぐにでも動き出せる環境にあるのということだと思う。それを生かさない手はないと思った。交通機関一つ、コンビニエンスストアの数一つとっても、やはり地方よりも恵まれた環境であるといえると思うが、自分が本当にしたい仕事ができるのであれば、多少の不自由は気にならないだろうとも思う。

⑨ スポーツビジネス学科2年 深澤 亮輔

もともとやる前から考えすぎて、失敗を恐れて動けない自分だが、今回の訪問を通じて、「自信をもって行動していいのだ」と感じることができた。失敗を多く経験して乗りえたからこそ自信を持っている方も多いかったし、やってみなければできるようにはならない。一人で仕事をしているわけではないので、周りに助けてもらいながら、だんだんできるようになっていけばいいのだと思えるようになった。

稚内で伺った、1年後、5年後、10年後と、目標を先に決めてそれに向けて行動するというお話がとても印象に残っている。先に不安を抱くのではなく、目標を決めておくことで、今するべきこと、できることも明確になり、達成できることで自信にもスキルアップにもつながるというのはとてもいいと思った。自分の就職する会社にそういう制度がなくても、自分で取り組んでみたいと思ったし、今これから的学生生活の中でも、目標を決めて達成していきながら先を目指したいと思う。

今の時点では、自分が熱意をもって取り組んでいる「マラソン」という分野に関わって働くことができるというのが理想だが、そうでなかつたとしても達成感や満足を得られることは何かと探し、それに向けて努力していきたいと感じている。

地方都市は、札幌よりも不便ではあるかもしれないが、仕事して生活するという観点で見れば、あまり問題になるとは思わなかった。やりたいことができることが最優先で、場所はどこでもなんとかなるだろうと思うことができるようになったのはよかったです。



